

「効率的な実技指導に関するレポート」

名古屋芸術大学講師
j e t 全日本エレクトーン指導者協会指導スタッフ
山口隆啓

はじめに

電子オルガンは他の楽器に比べて音づくりにたいへんな労力を必要とする。

少し誤解をまねくかもしれないが、ここで言う労力とは、何年何十年もかけて自分の音づくりをする楽器群（声もふくめて）に比べるということではなく、電子オルガンの特徴である演奏表現におけるレジストレーションの重要性と、その作業にかかる時間量のことである。

従来電子オルガンのレジストレーションチェンジはリアルタイムで可能な範囲に限られていたが、「メモリー」の登場とともに事前の「仕込み」に比重が移され、これが演奏表現上たいへん重要な意味を持つようになった。

我々も日頃の指導ではキーボードテクニク、表情付けの他にこのレジストレーションを指導（アドバイス）することが多くはないだろうか？

音楽ジャンル、楽器知識にはじまって音場・音響まで気を配らねばならない…。

また最近ではエフェクトの知識も不可欠である。

そういう状況下で効率よくレッスンをすすめるにはどうしたらよいか？

私のクラスでの状況を具体的に報告したい。

実践内容

普段学生と私は [A] のような配置で指導することがほとんどであったが、4月にいちはやく E L 9 0 0 を 2 台備品化してくれたおかげで、新しい試みを実践するよい機会が得られた。

これは M I D I 端子を使って学生のレジストレーションを指導者側で制御するというアイデアである。

学生の準備を時間軸で見ると、選曲 アレンジ レジストレーション 弾き込み 完成度アップとなるが、電子オルガンでは が同時進行の場合が多いようである。

今回の実践は特に で効果を発揮するシステムであると思われる。

[B] のセットで説明をすると、(は V O L U M E)

まず学生側のオルガンの M I D I - O U T と指導者側のオルガンの M I D I - I N 端子をケーブルでつなく。

学生側の V O L U M E を M i n i m u m にする。

指導者側の V O L U M E を M a x i m にする。

学生の F D のバックアップを取り (E L 9 0 0 は簡単にできるので重宝する) 2 台のオルガンに読み込む。

指導者側のエクスプレッションを E X T . にする。

学生が演奏を開始、指導者は適宜レジストレーションをチェック、エディットしながらメモリーをする。

指導者側で F D にレジストレーションを録音する。

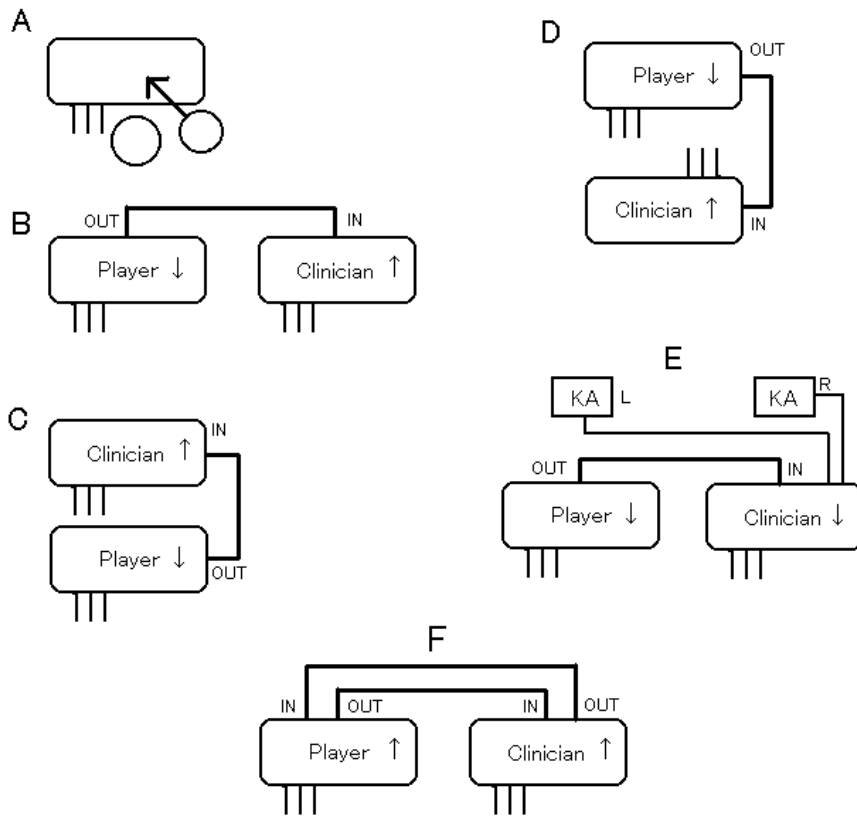
S o n g をまたいで演奏する場合は 2 台とも次の S o n g を読み込み、作業を繰り返す。終了したら指導者側の F D のバックアップを取る。

以上の実践では指導者のオルガンから音が出るので、生徒が弾きづらいという欠点もある。そこで生徒の正面から音が聞こえるように [C] セットも実践したが、生徒側で少し音がこもったような感じがし、本来のレジストエディットの面から問題が残る。

[D] セットの実践では音はよく聞こえるが P A N が逆になり、またお互いに顔、表情が見えないことでレッスンとしては無機質な感じが残る。

結局 [B] セットで落ち着いたが、指導者側の V O L U M E を 8 0 % ~ 1 0 0 % にすることで生徒も慣れてきた。

理想形は [E] セットだが、場所・備品の点で普段のレッスンでは実践できない。



今年は10月のコンサートに向けて、全員が1曲オリジナルアレンジ、オリジナルレジストを組むことを条件に作業に入った。

14人の曲目リストは以下のとおりである。

この実践で効果のあったポイントをそれぞれの曲についてあげてみる。

- 1 ムーンリバー (H・マンシーニ) シンフォニーオーケストラ
弦とホルンの音量バランス
- 2 パソ・ドブレ (アルフレッド・リード) 吹奏楽
リード楽器の組み合わせ選択
- 3 リュートのための古風なアリアと舞曲より1・4楽章 (レスピーギ) 弦楽器
メモリーごとのストリングス配置を整理
- 4 驚愕より4楽章 (ハイドン) シンフォニーオーケストラ
ストリングス1-7の選択

- 5 ヘンゼルとグレーテル序曲（エンゲルバート・フンパーディンク）シンフォニーオーケストラ
M I D I 相互接続によるダイナミック指導
- 6 交響曲ジュピターより4楽章（モーツァルト）シンフォニーオーケストラ
弦・木管・とティンパニの音量バランス
- 7 交響曲第4番より4楽章（チャイコフスキー）シンフォニーオーケストラ
ブリリアンスの矯正
- 8 交響曲田園より5楽章（ベートーベン）シンフォニーオーケストラ
ストリングスビブラートの矯正
- 9 Love is Here To Stay（ガーシュイン）ピアノトリオ
M I D I 相互接続によるアーティキュレーション指導
- 10 くるみ割り人形より行進曲（チャイコフスキー）シンフォニーオーケストラ
木管と弦のバランス
- 11 仮面舞踏会より前奏曲（ベルディ）シンフォニーオーケストラ
リバーブの設定
- 12 オン・ブラ・マイフ（ヘンデル）歌共演
パッド音色の選択
- 13 デュークエリントンメドレー（デュークエリントン）ビッグバンド
M I D I 相互接続によるアーティキュレーション指導
- 14 アパラチアン序曲（バーンズ）シンフォニーオーケストラ
リズムインストゥルメントによるパーカッションバランス

今回の実践におけるまとめをすると、

[A] セットでは弾きながら（聞きながら）レジストエディットをすると、学生の邪魔をすることが多くなるが、[B] では学生がのびのびと演奏できる。指導者の腰の負担も少なくなる。

もちろん生徒が自分でレジストをエディットする場合はこの限りではない。

指導者が生徒と同じ立場（位置）でバランスチェックできる。

演奏と同時進行でチェック&エディットができ、時間の節約になる。

指導者も学生と同じようにすぐに音出し確認ができる。

生徒側のディスプレイと指導者側のディスプレイは別表示になるので確認がしやすい。

レジストレーションが完成した時点では [F] セットのように M I D I を相互接続し、メモリーを連動させることにより、ダイナミック・アーティキュレーション指導がスピーディに展開できる。この場合は2台の V O L U M E を 5 0 % 5 0 % にし、エクスプレッションを INT. にする。また相手が弾く時は自分の E X P . ペダルを下げる配慮が必要である。

まとめ

今回の実践はあくまでもレジストレーションを共同作業で作り上げる段階で有効なものあり、すべての指導をこのMIDI接続で行うものではない。

電子オルガン指導ではレジストレーションの作成がたいへん重要であり、また時間をかけることも事実である。

私たち指導者は限られた時間の中で、いかに効率よく指導をしていくか？

従来のピアノや声楽と同じ単位で電子オルガン指導を考えるのは辛い。

少しでもレジストレーションにかける時間を減らし、演奏力・表現力に時間を割きたい。

ただここで問題になるのは、レジストレーションはだれのものか？という疑問である。

「音を作り上げるのは演奏者の責任ではないか？」「レジストレーションも含めてこそその人の力ではないか？」等々。

確かにそのとおりであるが、まだ学生の段階でいわゆるプロの意識をあてはめるのも酷というものである。レジストレーションも勉強のひとつと私はとらえている。

電子オルガンは弾く場所によって音が大きく変わるという性格を持っているため、指導中だけではなく外部でもこの方法が使えればたいへん助かる。

今後はステージにおけるレジストレーションの調整もこの方法が使えないかと模索中である。経験上ミキサーによる調整よりもレジストレーションの変更の方が早く解決することが多い。客席に電子オルガンを運び、MIDI結線をするわけにはいかないので、パソコン用のソフトをぜひ作ってほしい。

これがあればレッスンでも大いに活用できると考える。メーカーに切に望みたい。

最後にこの実践に協力してくれた生徒たちに御礼をのべて終わりにしたい。